

近衛信尋筆、狂歌合『玉吟抄』本文と校異

大 谷 俊 太

『玉吟抄』は、左方作者・潤甫周玉、右方作者・三条西公条により、堀川百首題で詠まれ番えられた百番に、三条西実隆が判を加えた狂歌合である。堀川百首題といういわば和歌の土俵で詠まれた狂歌百首の現存最古の例であり、五山禪僧と当代有数の歌人との組み合わせからしても、室町期の狂歌資料として頗る興味深い。

本書は、久保田淳氏により見出され（『叡山文庫蔵書目録抄略注』和歌史研究会会報16 昭和40・2）、井上宗雄氏が『中世歌壇史の研究 室町後期』（昭和47）において言及され、未刊国文資料『中世歌合集と研究（続）』（昭和49・10）に解題と翻刻を収載された。また、別個に同時進行の形で高橋喜一氏によっても解題と翻刻が行われ（岡見正雄編『室町ごころ』昭和53、角川書店）、その後、『狂歌大観』本文編（昭和58、明治書院）にも収載された。既に三度の翻刻がなされたのであるが、何れも叡山文庫所蔵本を底本とする。すなわち、本書はこれまで他に伝本の報告のない孤本とされてきた。

しかしながら、近世初期の近衛家当主、近衛信尋（慶長四年¹⁵⁹⁸～慶安二年¹⁶⁴⁹）による筆写本が陽明文庫に伝わる。近衛信尋筆本は、慶長十三年の奥書を持つ叡山文庫本より書写年次は下ると思われるが、「天文十年辛丑三月十六日」

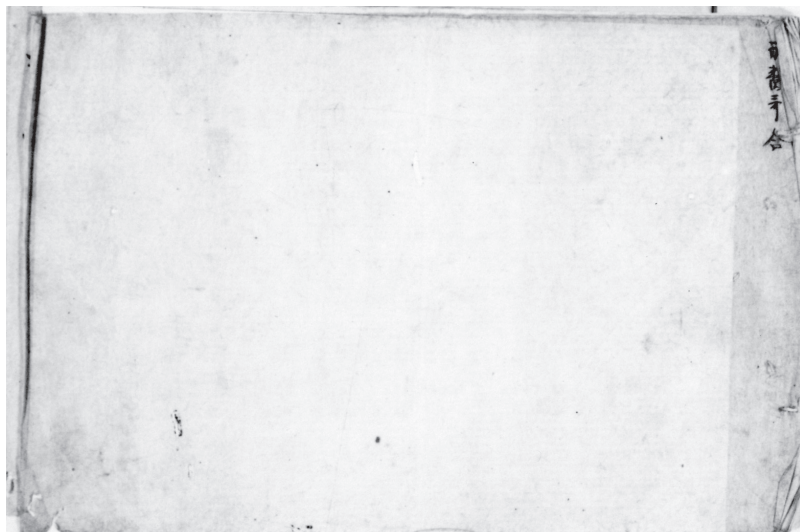
の元奥書を持ち、成立後十年ほどにおける書写本をもととする。外題・内題とも「百番哥合」とあり、「玉吟抄」とは名乗らず、作者名も「三卜」「山蒼齋」とのみ記し判者名も記さないのは、既に言い捨てではあり得ないが匿名性を愉しみもする知的な遊びとしての当時の狂歌の位相を示しているよう。

近衛信尋筆本にも四十九番・百番に依拠本の段階ですでに失われていたと思われる脱落があるなど若干の不備はあるが、それ以上に、叡山本の十五番・三十六番に欠けている判詞があるなど、叡山本の欠落を補うことができる。さらに、本文の内容的異同に関しても、たとえば従来意味の通じにくかった九番左の歌、「山賤の宿のくらせばうたねども土戸あけたるかき蕨かな」の上句を、信尋筆本により「山がつのやどにくらをばもたねども」と校訂できるなど、信尋筆本の優位性を多くの箇所指摘できるのである。

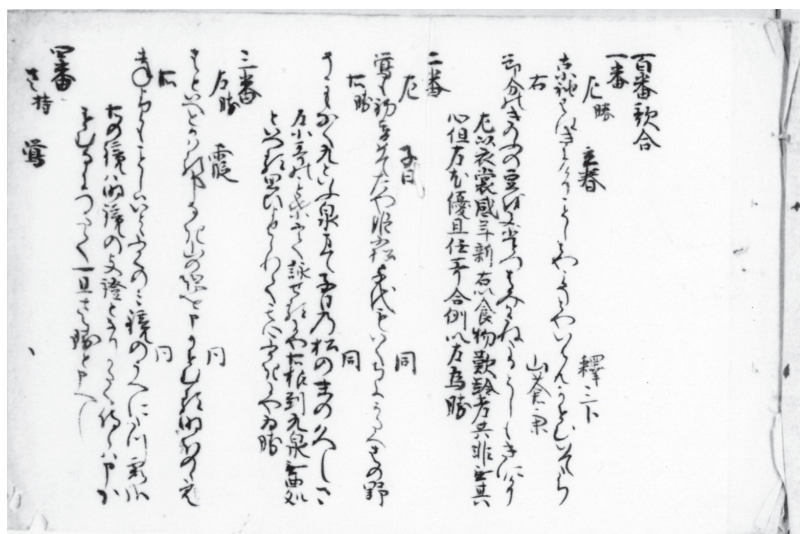
近衛信尋筆本の書誌事項は左の通り。

仮綴、横本、写、一冊、縦131糎・横205糎、外題「百番哥合」（但、右端上に小さく打付書で墨書）、内題「百番歌合」、奥書（書写識語）「天文十年辛丑三月十六日」、共紙表紙、墨付十六丁、料紙は楮紙、半丁に二十四行書。陽明文庫一般文書目録（6888）。

以下、詳しくは後稿に譲り、まずは近衛信尋筆本を翻字し、各番の後ろに叡山文庫本との校異を示す。



(仮綴表紙)



(1丁表、巻頭)

通場の庭へのはる雪やあーりねすゝと新
 木 木 雪のふりかへる雪のふりかへる
 雪のふりかへる雪のふりかへる
 五番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 六番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 七番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 八番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 九番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十一番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十二番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十三番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十四番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十五番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十六番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十七番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十八番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十九番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十番 雪のふりかへる雪のふりかへる

(1丁裏)

八番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 九番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十一番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十二番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十三番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十四番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十五番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十六番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十七番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十八番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 十九番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十一番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十二番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十三番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十四番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十五番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十六番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十七番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十八番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 二十九番 雪のふりかへる雪のふりかへる
 三十番 雪のふりかへる雪のふりかへる

(2丁表)

(14丁裏)

(15丁表)

〔凡例〕

- 一、翻字は原則として原本表記の通りとする。
- 一、旧字体・異体字・合字は通行の字体に改めた。
- 一、狂歌に番号を付した。
- 一、狂歌・判詞部分の清濁を分かち、判詞部分には句読点・並列点を施した。
- 一、挿入語句は本文に組み込んだ。
- 一、虫損等による判読不能箇所は□で示した。
- 一、各番の後ろに叡山文庫本との校異を、「・（陽明文庫本本文）」——（叡山文庫本本文）」の形で示した。
- 一、校異は、漢字・仮名の表記の違い、送り仮名の有無は示さない。
- 一、校異には私に濁点を付さない。また、叡山文庫本に於る見せ消ちは訂正後の本文に従った。なお叡山文庫本が記す、二番以降の各歌の作者名「三」「山」は校異に掲げない。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻字・校異〕

〔外題〕「百番哥合」

・「百番哥合」——「堀川院御百首狂歌 全」

〔見返し題・（ナシ）〕——「玉吟抄 式部卿」

〔扉題〕・（ナシ）——「玉吟抄 題堀川院御百首狂哥」（扉右に）「判者逍遙院殿堯空 頗眉目之至極可謂者歟／山
蒼齋 称名院三条西殿／釈三卜 栖雲寺潤甫和尚／両吟也」

〔内題〕「百番歌合」

・「百番歌合」——「山蒼齋釈三卜百首和哥」

一番

左勝 立春

釋三卜

1 古小袖春はきにけりことしとやこぞとやいはんかすむいでたち

右

山蒼斎

2 節分のきのふの豆を又ひとつはみかさねたるとしもきにけり

左以衣裳感年新、右以食物歎齡老、共非無其心。但左尤優、且任哥合例以左為勝。

二番

左 子日

同

3 鶯も初音めでたや姫小松千代もいくちようたへ春の野

右勝

同

4 そこもなく九といふ泉まで子日の松の末の久しさ

左小哥のこと葉にて詠ぜるにや。右根到九泉無曲処といへる、思ひよせられて其心ふかきにや。為勝。

・音——子 ・小松——子松 ・詠せるにや——詠せるかや ・曲——林 ・処と——処

三番

左勝 霞

同

5 春といへどかはる事なき山の端を申かすむる明ぼの、空

右

同

6 去年よりもことしはいとゞふかくのみ鏡のうへにたつ霞哉

右の鏡は明鏡の支證となりがたく侍らば、申かすむるにつきて、一旦左勝と申べし。

・事——年

四番

左持

鶯

7 道場の庭であはする鶯や所がらなる十こゑ一声

右

8 春を冬にとりちがへてやなかざらん鶯のみにさえかへるそら

鶯あはせ、とりちがへのみ、ともに勝負決がたし。

・鶯や——鶯の ・冬——名 ・さえかへる——寒かへる

五番

左勝

若菜

9 年寄のあやかり物にはむ若な我くろかみに雪はふりつゝ

右

10 かきよせてたゝくわかなのほとゝと唐土日本のとりぐゝの声

右世俗のことわざにや。たしかなる出所もきこえず。左むすび句古風、優に侍り。勝侍べし。

・物に——物の　・はむ——つむ　・ことわざにや——ことはさかや

六番

左勝　　残雪

11 去年の冬つくりをきたる雪仏ねはんの比にきゆる二月

右

12 江南の数十程にも空さえてまだ雪つくす春やなからん

右彼杜常が詞あらぬさまに取なされたる、粉骨には侍れど、泥丸の悲感に何事か及侍らん。尤為勝。

・また——×　・侍れと——侍れとも　・悲感に——悲感には

七番

左持　　梅

13 梅花霞のころもうちきつ、後は法師にならんとや思ふ

右

14 人の妻西向南北むきや東は春に匂ふむめむき

法師・室嫁、相對よき持にや。

八番

左 柳

15 さかへたる柳が酒屋春くれば一家一族よはぬ日もなし

右勝

16 けづりては春のはがすみこそげんと楊枝木される青柳の陰

酒のみくらしたるよりは、楊枝をつかふべきたしなみはやさしく侍り。勝とす。

・つかふへき——つかふ ・たしなみは——たしなみ ・勝とす——為勝

九番

左持 早蕨

17 山がつのやどにくらをばもたねども土戸あけたるかぎわらび哉

右

18 山がつのいやしき宿も結構に春はみせける軒の蕨手

山がつの住居、ともに持とす。

・くらはは——くらはは ・もたね——うたね ・結構に——結構も ・みせける——見せけり

十番

左 桜

19 犬ざくら花散比は我門でほえぬ人なき春の夕暮

右勝

20 花をみるさかなはたこのさくらいり手毎にあかぬ色香成けり

門犬よりは海蛛は賞翫のかたにはまさりぬべくや。

・門犬——門の犬 ・まさりぬ——さりぬ

十一番

左勝

春雨

21 八さかり七のまへの春雨にながめわびたる雲のはら哉

右

22 もえ出る草のあたまを春雨や子を思ふ親の心とぞみる

右はかの養得自為花父母の心にや。たしかにもきこえず。左時節景氣言語道断、いかにもく勝べきにこそ。

・たしかにも——たしかに ・左——x

十二番

左持

春駒

23 老たるは道ををしふる春の野に若な駒やおどりはぬらん

右

24 あひらしやまことの牧にみるよりも猶いさみたる駒舞のかほ

若菜の駒、又駒舞、よき持にや。

・若な——若け　・若菜——わか気

十三番

左持　　帰馬

25 うれしなきになきてやかへる去年今年御汁のみにもならぬかりがね

右

26 口／＼にいひはやされて跡はさき前なは跡にかへすかりがね

左哥下句殊に思入たり。右哥ながめやりたるさま眼前の風情にて捨がたし。是も同科にや。

・かへす——かへる

十四番

左持　　呼子鳥

27 もてなしのたくみもみえぬ山中におほつかなくもよぶこどり哉

右

28 きたりたりと計いひし当麻なる中将姫はよぶこどり哉

左右ともによろし。又持にや。

左勝
苗代

29 子ども共なはしろ水にまくたねのもみにもみても鳥を追哉

右

30 かねてまづもみの中より思ふ哉わらに成ての後の苗代

左下句優美に侍り。勝とす。

・なはしろ水——苗代の水　・まくたね——蒔種　・まつ——先

・左下句優美に侍り。勝とす——×（叡山文庫本二判詞ナシ）

十六番

左勝
堇

31 春の日にてりつけらるゝ花なれど色くろからぬすみれ草哉

右

32 なぜにさて名は赤人の紫のすみれ咲野をなつかしといふ

左心尤たくみ也。勝とす。

・赤人——ある人　・尤——花　・勝とす——為勝

十七番

左勝

杜若

33 業平のはなやかなりしつまはづれ紫色のかきつばたかな

右

34 ゆひつくる藤なき池のかきつばたよりかゝる浪によるくとして

業平のつまはづれに垣ゆひつくる手つきは及がたし。

十八番

左

藤

35 花さける藤原氏の公家の門たゝきあくれどみな人はなし

右勝

36 花に今咲や刀の藤まきのつかのまにしてくるゝ春かな

いにしへにはかげにかくるゝ人おほみとこそありしに、零落の藤氏の門しばし口をとぢ侍べし。右下句優にや。
勝侍べし。

・花——藤　・あくれ——あけれ　・みな——見る　・人は——人も　・侍へし——侍らん

十九番

左勝

款冬

37 さかりぞと井手の山吹つげまはる人は口き、花は口なし

右

38 岸のうへにこぼる、斗山吹のふなもりしたる井手の玉水

左下句心詞よろし。勝とす。

・さかり——盛　・山吹——款冬　・まはる——まはり　・勝とす——為勝

廿番

左

三月尽

39 音をなくや春の日数も今はや九十に及老のうぐひす

右勝

40 梓弓春の行糸のけふはまだてんたうくりのやよひなりけり

左九十にをよぶ鶯の哥、耳もとめがたし。右は今少心あるにや。勝とや申べき。

・行糸——行末　・てんたうくり——てんだうくり　・やよひ——矢よひ　・左九十——左右り
・耳も——耳に　・勝とや——勝と

廿一番

左

更衣

41 柳色にあはせをけふは織てきん春のなじみの忘れがたみに

右勝

42 衣がへうき黄衣の長老の身もちくるしき寺のあり様

右寺物寺領心にもまかせざるうへ、大衆とては悪僧など立まじりたるに、入院も物うきにや。心ある駄也。勝とす。

・柳色に——柳色の　・寺物寺領——寺持領　・心にも——心に　・悪僧——玄僧　・勝とす——×

廿二番

左

卯花

43 山里は夏になるまで卯花の雪かきとらぬ冬ごもりかな

右勝

44 誰も今ぬるとはみえぬ夕ま暮卯花がきは白壁にして

寒国の雪牆より、殿閣の白壁は見所あるにや。可為勝。

・寒国——寒園　・見所あるにや——見所にや

廿三番

左勝

葵

45 木曾殿の御うちにさける葵草いくさに花をちらすとぞ聞

右

46 みすの上にかゝれるよりもかたびらの碁盤にあふひみるが涼しき

左いみじくみえたり。右はこまやかな^(ママ)すがたあり。ともに持とも申べきを、いくさはかちぬるをさきとすべければ、右まけて侍れかし。

・碁盤——台盤　・みるが——見るそ　・こまやかな——こまやかなる　・まけて——負に
・侍れかし——侍るへし

廿四番

左勝　郭公

47 夏の夜のくらまの山の郭公あふみふんばりなのる一声

右

48 とがりたるやりに付たるしでたをさ耳の底までとおれ^(とぞ)□□なく
左右いかめしげなる声也。猶左たけありて聞ゆ。可為勝。

・なのる——名乗　・とおれ□□——通れとそ　・左右——右は　・聞ゆ——×　・可為勝——為勝

廿五番

左持　菖蒲

49 いくたりの宿のつまとか成ぬらんやさし過たるあやめなりけり

右

50 わたるにも行末とおき淀橋のながくしねを引あやめかな

左右ともによき持にや。

・いくたりの——いくたり

廿六番

左勝 早苗

51 わけもなきことはりなれどさ乙女がうたふ田哥のこゑはおもしろ

右

52 打みだれとるや早苗の程もなくふしだつふしをうたふひとこゑ

両方の田哥同科にや。但左むすび句、其興あり。可為勝。

・哥——声 ・ひとこゑ——声く ・但左——但

廿七番

左勝 照射

53 ますら男が鹿待よひにくる狸なまふすべにやともしたきけん

右

54 何事もともしきよりや後の世の罪を忘れて鹿ねらふらん

左尤勝侍るべし。

・くる——見る

廿八番

左勝 五月雨

55 秋ならば餅にもならん栗の花さもながたれて五月雨ぞふる

右

56 此日比入ぬし雲の五月雨のさみつる事ぞはるゝまもなき

右の哥第四句めづらしくきこえ侍るを、左哥あらぬ事を取出されたる、打みるに先へもひかれ、むせかへりを
かしくみえ侍り。いかにも勝侍るべし。

・右の——右 ・取出されたる——取いたされたり ・先へも——先つも ・むせかへり——んを帰り
・勝侍るへし——勝と侍へし

廿九番

左 盧橘

57 散比は御庭はきぬる五月まで花たちばなの袖の香ぞする

右勝

58 言葉さへ実さへ花さへをしのかて橘やきそしやうぐわんの物

左歌数ならぬ袖までも匂ひあるさまやさしくは聞え侍る、右は古風をそのまゝをきながら、眼前の賞翫は誰人

か心ひかざらん。仍為勝。

・やさしくは——やさしく

卅番

左持 螢

59 さかさまに恋もなる世の螢哉胸にはもえて尻ぞこがる、

右

60 人の行さきはちやうちんたい松や螢は尻をなどてらす覧

左右共に前後顛倒の作法、同科にや。

・行さき——行前

卅一番

左勝 蚊遣火

61 時をあげよせくる蚊をや待ぬらん賤はかやりのさきをそろへて

右

62 目もあかずけぶき煙に蚊のまつげ涙落して立しぎるら□^(ん)

左のやりさきには何物か面をむけ侍らん。右、幸に立しぎるよし申侍れば、左勝どきをあげ侍べし。

・けふき——けしき ・まつげ——まつも ・立しぎるら□——立しぎるさん

・やりさきには——鍵さきは

卅二番

左持 蓮

63 蓮の葉のうへにのりたるあま蛙たゞ一飛にまいるごくらく

右

64 をしなべてわぶるあつさを蓮の実のくつとぬけたる池の涼しさ

左蛙の一飛はかの如一念頃即得往生極樂世界の文もまのあたりなるさまにて殊勝に聞えたり。右蓮の実のぬけたるしたてやさしくしたてられたり。なずらへて持とす。

・蓮の実の——荷の実の ・蓮の実のぬけたる——蓮の実ぬけたりし

卅三番

左勝 氷室

65 わび人は雪も氷も及なしいつもの供御をそなへても哉

右

66 氷室山いそぐ御調に汗零道くだりたれいそぐやく人

右下の句のしたて、なにとなく憚あるやうにきこえたり。左わび人の述懐、その方人多かるゆへに勝と申べし。

・いそぐ——いかに ・御調に——御調も ・汗零——汚しつ、 ・方人——かたへ ・申へし——すへし

卅四番

左勝 泉

67 泉殿にほしい黒塩取ならべ瓜ひやしたる船の涼しさ

右

68 暑日にてりつけられてあら金の土の泉にわくとみゆらん

右はあまりにいがく敷さまたり。左にぎは、敷によりて、心よせなれば勝とす。

・ほしい——ほし飯　・泉に——泉も　・あまりに——あまり

・いかく敷さまたり——いかくしきさまなり　・にきは、敷——にきはしき

卅五番

左 六月祓

69 秋風のあすより福を身にしめとけふ貧ぼうのはらひをぞする

右勝

70 みそぎしてかへれる空の暮はて、道のしるべはあけ灯籠かな

左 秋風の吹を福に取なされ、したてめづらしく、況富貴を求たることがらよろしく侍るを、右の哥下賀茂のあたりより御祓のかへさの有様、眼前の景気捨がたきに付て勝侍べし。

・しめと——しめて　・吹を——吹　・取なされ——取なされたる　・勝——勝と

冊六番

左 初秋

71 秋のきてむすめや孫のこのねぬるあさのひえく袂涼しも

右勝

72 かたびらにあはせをかさね今朝のまは小袖もよしや初秋のかぜ

左はいやしきに付て、右を勝と申べし。

・ひえく——むらく・左はいやしきに付て右を勝と申へし——×（叡山文庫本ニ判詞ナシ）

冊七番

左持 七夕

73 七夕をうらやましとやよばひ星すばるがあたり飛まはるらん

右

74 梶の葉にもるさうめんのそろくと星の別は涙落べし

左右共に心ありげに見えたり。持とす。

・さうめんの——さうめん・ありけ——有斗

冊八番

左持 萩

75 宮城野に分入すねのはぎが花爪のさきまで錦をぞきる

右

76 旅人よ盗ある野べにきてねはぎはこはし用心をせよ

是もよき持にや。

・左持——左　・盗——ぬす人　・用心を——用心の

卅九番

左勝

女郎花

77 枝も葉も十六七におひたちてよめ入ころのをみなへしかな

右

78 女郎花あだにぞなびく月の中のかつら男にけしやうせられて

右あだなるさま心もとまらずや、左深窓の行さき尤床しきにつきて勝とす。

・（左右ノ歌ガ逆）

・けしやう——けさふ　・深窓——深意　・床しきに——床しき

四十番

左勝

薄

79 薄おほるいちはら野べの花の色はうつりにけりないとよはくと

右

80 秋の野をすねむくりあげ分ゆけばあきまも見えぬ薄ざれ哉

右のすねにはきやはなどいふ物せまほしき姿よりは、左結句あぢきなげなるに心ひかれ侍り。

・おほる——おふる　・右の——右　・すねには——すねにや　・などいふ物——といふ物や
・せまほしき——ほしき　・よりは——なり　・あぢきなげなる——あぢきなげなる

四十一番

左

荳蔻

81 秋の野に風狂したるるかやの乱がはしき氣色をぞ見る

右勝

82 あひらしやかりもこそすれかるかやのみだるゝ中を分るかまきり

左さしたる風情もなきにや。右の蟪蛄隆車にむかひし心ばせよりは、是はさもありぬべしくしたてられたり。
勝と申侍べし。

・風狂——風犯　・氣色——姿　・是はさも——×　・申——×

四十二番

左持

蘭

83 いつの秋肩衣ぬきをしたるらんすそのばかりの藤ばかま哉

右

84 松ふぐりきせてかくさん名にしおはゞ枝にかゝりし藤ばかま哉

左心たくみ也。右は松の上をこまやかに思ひはゞかりたる、尤よろし。可為持。

・おは、——をは・哉——にて

四十三番

左持 萩

85 秋風のふく夜な／＼は心あれや春も付火に萩の焼はら

右

86 そよぐ也嶺より落る夕風に我住軒は萩山となる

左右させるふしなし。持にや。

・付火に——つけ火と・嶺——岸

四十四番

左勝 鴈

87 いくつらとよむ空よりも風たちてちらし書なる鴈の玉章

右

88 船なれや声をほにあげて河入の入日の末に鴈はきにけり

皮煎よりはちらしがき、やさし。可勝。

・玉章——本章　・声を——声　・末に——末の　・可勝——可為勝

四十五番

左　　鹿

89 さほ鹿は船子のなれるはてやらんかいろくところれてぞなく

右勝

90 今こふる鹿の涙やもくれんじかたらふ物はいづれほろく

左鹿の前生までいひ出されたる心たくみなり。右木棟子かたらふといふ事の侍るを、かたらふ物といひのこされたる、心有てきこゆ。可勝にや。

・今——妻　・可勝にや——可為勝

四十六番

左持　　露

91 露をけるあだちが原のしこ草の鬼の目にさへ涙をぞみる

右

92 秋の野は信濃が折の花の枝にをきちらしたる露の見事さ

左鬼の目にも涙といふ事の侍をよく取なされたり。右信濃がしたて目もあやに侍り。なすらへて持とや申べき。

四十七番

左 霧

93 夕霧の立るに物や思ふらん光源氏の秋の夕暮

右勝

94 囊をも脱するといふきりなれやしめりはいたく物をとをせば

右の哥たくみにや。勝侍べし。

・囊——茶つは ・脱すると——をかすと ・いふ——いふは ・たくみにや——たくみに

四十八番

左 槿

95 瑠璃色のつばみみえたる朝がほの命のべたまへ南無薬師仏

右勝

96 しやうくと咲たる色や牽牛子を吞て夜をきしたる朝がほ

左哥はかなき花の命を醫王の力にてのべ侍らん事有がたくこそ聞え侍れ。右の夜起は月などをみたるたよりにや。
やさしくこそ。牽牛子、此花の薬種まで尋こゝろみられたる、ありがたくきこえ侍れば、勝侍べし。

・仏——如来 ・左哥——左の哥 ・夜起は——夜をき ・薬種まで——薬性にて
・こゝろみられたる——こゝろ見えたり ・勝——勝と

四十九番

左勝 駒迎

97 た (ママ) 引あふ坂はさら／＼にかねもよげなり駒のくつばみ

右

98 此駒や林をわけて出つらんゑみたるいがの栗毛なりけり

左尤勝べきにやこそ。

・た ——— たくさを ——— あふ ——— 相 ・よげなり ——— よげなる ・勝へき ——— 勝ぬへき

五十番

左持 月

99 時をえし秋の半の古寺にいもほり僧は月をこそみれ

右

100 空にさてきつかとみゆる月の輪を熊なしと誰詠 (そめ) □□けん

左右勝負なし。

・えし ——— 得し ・僧は ——— 僧や ・空に ——— 空も

五十一番

左勝 擣衣

101 布なれど名をばきぬたとひゝかせてうつや時衆の秋の野の寺

右

102 たてをそろへ織や衣に横推をしや取なをし打はかしまし

左句に金声毎吟。彼岸行事の踊躍の心あり。尤可勝云云。

・衣に——衣の ・推——つち ・可勝——可為勝

五十二番

左勝 虫

103 小笠原馬場のあたりのくつは虫はみ物もなき宿のていかな

右

104 たうやくの生るあたりやさけぬらん野原の中にをこる虫の音

右たうやくをおそれたる虫、尤工には侍れど、哥合は哥の病をこそ難じ侍る事なれば、虻虫の病いかにもまけ侍るべし。

・生る——おふる ・さけぬらん——わけぬらん ・おそれたる——得たる ・侍れど——侍れ共

五十三番

左持 菊

105 うつろへばうす紅に花のかほべにをつけたる小少将かな

右

106 秋もはやふけて霜にぞうたれける是や昔の夜打そが菊

左 小少将のかほあひらしくみえ侍るを、右あらけなき夜打そが、なずらへて持とす。

五十四番

左持

紅葉

107 紅葉する山のおもてをみわたせばあかみ上戸のたつ田姫哉

右

108 木々は今葉守の神の宮ゐとてあかくみゆるは鳥ゐいがきか

竜田姫・葉守神、優劣なし。

・宮ゐとて——色つきて

五十五番

左

九月尽

109 鹿はほえ葛はうらみてとむれども暇こはずに秋はいぬめり

右勝

110 一とせを正五九月とつゝしむとけふに難なくたつる目出たさ

右祝言につきて勝と申べし。

・葛——葛 ・正五九月と——正五九月に ・つ、しむと——つ、しむも ・難——ほと

五十六番

左 初冬

111 神無月坂本あたりきてみればちりぐになる木葉猿哉

右勝

112 木々はみな落葉衣をきるまゝに入道したる神無月哉

右哥首尾相應、又可為勝。

・落葉——木葉

五十七番

左持 時雨

113 晴にけり今までこゝにふる時雨山又山に山めぐりして

右

114 此比は魔なくしぐるゝ山寺にげに仏法やさかりなるらん

左山うば、右天魔、勝負定がたし。

五十八番

左 霜

115 高さこの尾上にみゆる松ふぐり霜はをけどもやまぬしも風

右勝

116 わらはべの足の甲より先みえて今朝しもさむくはるゝ霜ばれ

左松ふぐり勝負の席にてはみれんげも有ぬべければ、足のこうははれの所作にもをくれ侍らし。勝べくや。

・しも風——下風　・こう——かう　・勝へくや——可為勝也

五十九番

左勝 霰

117 山ぶしのすゝかけのけさの山風に羽黒あられやふりかゝるらん

右

118 湯をわかしかけてをみばやあしやなる鑓子に似たる庭の霰に

左ことがらものくし。勝とす。

・かけてを——かけても　・似たる——似る

六十番

左持 雪

119 降つもるかたびら雪の跡みればいづくの里も地白にぞなる

右

120 あらつめたつめたといひて行まゝに我こそころべ雪ころばかし

左はたくみに、右はありくといひ出たる、よき持にや。

・出たる——出したる

六十一番

左持

寒蘆

121 よしもなくまして難波のあしもなし禪比なれや冬枯の比

右

122 あちゆらりこちへゆらりと一村はかれなで風のあしたゆく吹

左禪比をいひ、右は古哥によれり。共に持たり。

・禪比——禪法　・吹——ふく　・左——左は　・禪比——禪法　・共に——よき　・持たり——持にや

六十二番

左勝

千鳥

123 夕さればちりく——とんでふる雪に千鳥あしをもふんで鳴哉

右

124 理や此寒さには折たかん柴なくといふ千鳥たえく

左あひらし。仍為勝。

・ふんて——ふみて　・寒さ——さむき　・たえく——こゑく

六十三番

左勝　　氷

125 ふる寺の軒端のつらゝさがりけり御児の尻もさぞひえの山

右

126 つめたくも更に覚えず鯉鯽の汁の氷のくだけでぞ思ふ

是も左尤勝べし。

・鯉鯽——鯉鯽　・勝へし——勝たるへし

六十四番

左　　水鳥

127 をし鳥のふすまはいく重かぶるとも下びえすべき水のうへかな

右勝

128 鴛は衾池水さむしかも鳥はかしらからげて風いとふなり

左右鴛鴦の被、鴨鳥のかしらからげをくはへては猶見所あるにや。為勝。

・ふすま——衾　・いとふ——いたふ　・くはへては——くはへて　・猶——×

六十五番

左持　網代

129 畳あらば宇治十でうも敷程に床をかきたるあじろ守哉

右

130 小車の網代なりとや川風を牛つき眼しつゝもるらん

同科にや。

・敷——しく　・かきたる——うきたる　・川風を——河風に　・もるらん——守らん

六十六番

左勝　神楽

131 但馬路やおほる山枡の目も覚ぬ朝倉うたふ声はからびて

右

132 神の前かつらおもての寒き夜にから紙障子立まはさばや

左首尾相應、尤勝とすべし。

・おほる——おふる　・かつら——かくら　・左——左の　・勝とすへし——可為勝

六十七番

左持 鷹狩

133 御狩野にすゝむる酒のとりさかなせこを入れてぞ寒さ忘るゝ

右

134 髪はしらがつばさは野りけ雪の中に人は年寄鷹はわかやぐ

左右心たくみ也。持とすべし。

・左持——左 ・御狩野——御狩場 ・中に——うち ・鷹は——鷹ぞ ・すへし——申へし

六十八番

左 炭竈

135 賤士が年く炭をやくにして薪つみたる冬がまへかな

右勝

136 道風がかたみとやみん小野ずみは硯のうへによしすらずとも

道風が前にては賤士はかきけちてうせねかし。右勝べし。

・賤士——賤のお ・小野——小野の ・かきけちて——かきたちて ・うせねかし——うせぬかし
・勝へし——勝とすへし

六十九番

左 爐火

137 ふすばるに腹はたてども炭頭しかもかたくて打もわれず

右

138 戸障子をたてまはしたる田楽に風も入こぬ埋火のもと

右は座敷の牀にぎはゝしき。つきて勝とす。

・かたくて——かたて　・右——右勝　・埋火——爐火　・右は——右　・座敷の——坐席之
・にきはゝしき——にきは敷に　・勝とす——為勝

七十番

左勝 除夜

139 おさなきはさこそうれしく思ふらん我むつかしきあすの正月

右

140 むかふべき鏡のためのもちいとしてつきたてゝはやく年ぞ暮ぬる

左尤あいらしくきこゆ。可勝。

・おさなき——をさあき　・うれしく——嬉しと　・つきたてゝ——つきたて　・年ぞ——年は
・暮ぬる——暮けり　・可勝——可為勝　・×——除夜の程なり

七十一番

左勝 初恋

141 思ひかけ胸わきかへるやくはん恋やがてさめぐねをやなくらん

右

142 恋そむる心の中のはつほをば神に手向て末もいのらん

右五文字無下に聞えたり。左いかにも勝べし。

・さめぐ——さめぐてそ・恋——思ひ・中——うち・はつほ——初尾・右——右の

七十二番

左勝 忍恋

143 ぬしあるを忍びぐの白浪はたつ名にかへて打こみぞする

右

144 あらはればおもひきるべき恋の道いさぬす人に成て忍ばん

左ことがらやさし。勝と定申べし。

七十三番

左勝 不逢恋

145 我恋はたゞ丸桶に四はうぶたいかにまはせどあふ事もなし

右

146 立もせずねもせで物を思ふにはいすかのはしとなるる中哉

左尤工也。可為勝。

・事——よし・立——たち

七十四番

左

初逢恋

147 恋衣さもあながちに焼しめてふすぼりくさき新枕哉

右勝

148 つくぐしほうけぬ若衆こはじけて初て今夜笠やぬがせん

左下句よろし。右ことわざも思ひ出られて、とりあへぬ若衆の作法いかとおぼつかなく覚え侍り。あひたる
処にて笠をぬぐといへる諺も、かやうの事にやとまで思ひやられてをかし。勝侍べし。

・今夜——今宵・いか、と——いと、・勝侍へし——勝と侍へし

七十五番

左勝

後朝恋

149 朝めしの出くるまでにねふせりてかへらぬ心おくぞしらる、

右

150 御さかづきひとつくとしゐられて恋さへけさは二日ゑひかな

左すがたたぐひなし。結句万端こもりたる心中、餘情たぐひなし。いかにもく勝侍べし。

・朝めし——朝食・けさ——朝・ゑひ——酔・たくひなし——又たくひなし

七十六番

左 逢不遇恋

151 一さかりきし人なれどき身世に秋はてらるゝこはりかたびら

右勝

152 一夜にて見おとされしをよりてすふ口おしければ猶ぞ恋しき

右心詞やさし。為勝。

七十七番

左持 旅恋

153 古郷の子どもが母も思ひやれ長旅しつゝ、独かもねん

右

154 小姫ごぜ洗足させし足のしるあかでも今宵いざかたらはん

左は柿本の古風をしたひ、右は山の井の清き流を思へる、ともによき持にや。

・こせ——子せ

七十八番

左 思

155 思ひつゝぬればや若衆みえつらん夢としりせばはてざらましを

右勝

156 恋しさを力車にのせかねて物おもひとや人のいふらん

左の堂亀の思ひねよりは、力車のおもきには心ひかれまし。為勝。

・思——思恋　・はて——覚　・思ひね——思ひ　・力車——力斗　・おもき——おもひ
・ひかれまし——ひかれなまし

七十九番

左勝 片思

157 我中をになひてもみばいかならん人はつりがね我はちやうちん

右

158 しらじかし我身にshめて手枕をいれて風ひく肩おもひをば

左歌長於譬喩。為勝。

・片思——片恋　・みは——みよ

八十番

左 恨

159 うらむなよ肩のうへにて柿うちわあふぎのけたる我あひのかぜ

右勝

160 立帰きげんをとらん様もなし過言まじりに恨はてゝき

右心工也。為勝。

・恨——恨恋　・立帰——立帰り　・きけん——機嫌

八十一番

左勝 暁

161 大ねするぬた聖道のくみあぐるあかつき起は夜明にぞなる

右

162 明ぬるかかぶる鼠のしづまりて足音忍ぶ天井のうへ

右こまやかにありくと聞えたるを、左のぬた聖道の後夜起、心詞殊勝、鼠は穴かしこ負侍べし。

・大ね——大寝　・明ぬるか——明ぬるに　・聞えたるを——聞えたり

八十二番

左持 松

163 湖の汀なれどもから崎の松の枝つきしほらしきかな

右

164 茶せん松すぐなるはしんゆがめるは又そへにとてとにかくにきる

左のから崎の松こそたぐひなく侍れど、右のたて花に池坊もん阿弥が花瓶には、猶こまやかなる枝さしや侍らん。
なずらへて持とす。

・茶せん——茶羹　・そへに——そへよ　・侍れ——侍　・池坊——池之坊　・もん——文
・花瓶には——花瓶に　・なずらへて持とす——×

八十三番

左持

竹

165 さきも根も心ちよげなる竹の子の六寸斗おへそ出たる

右

166 男をばせぬくといふ御比丘尼のはらむに似たる竹のじねんこ

左尾籠、右過言、いづれも一ふしなきにあらず。是も持と申べきにや。

・おへそ——おひそ　・しねんこ——しねんに　・いつれも——何も　・是も——是も又
・申へきにや——申へきや

八十四番

左勝 苔

167 萱堂の軒におへたる高野苔弥勒の世まで根をやさすらん

右

168 むさぐとはらはぬ庭は岩ほにもならねど苔のむすさぐれいし

左 弥勒の世をかけたる、こちたくきこえたり。為勝。

・おへたる——生たる　・岩ほにも——いはひても　・ならねと——なしても　・こちたく——古事たくみ

八十五番

左勝 鶴

169 世中に鷹といふ物なくもがな千代もと思ふ鶴の子のため

右

170 仙人の葉なりとや鶴くびにのみこむ酒ぞ千代の友なる

左 下句殊にすぐれたり。勝とす。

・友——ため

八十六番

左 山

171 しろむれば雪のごとくなる米をふじの山程つみてもたばや

右勝

172 かるき塵積てならばいかなれば風の吹とも山の動ぜぬ

左ねがひ事あまり芬なるにや、右哥がらたけ有てきこゆ。勝とす。

・つみて——つきて ・いかなれば——いかならん ・動せぬ——動せず ・ねかひ事——ねかひ斗

・あまり——あまりに ・右——右の ・勝とす——為勝

八十七番

左 川

173 世中は何やかやらいとまなみせり／＼川に行月日かな

右勝

174 何事も昔にはあらぬ今出川内裏のあたりむさと流れて

左は世間の観念、右は朝廷の零落をなげくにや、左まけて侍れ。

・流れて——浪て流歌 ・まけて侍れ——まけに侍れ ・×——右勝

八十八番

左勝 野

175 おさめたるはては有けりまつり事その細川のむさし野の原

右

176 いやな事聞もいれじと世中にかぶりをうらば内野なりけり

左積善家有餘慶ことはり殊勝也。為勝。

・おさめたる——納めたる　・聞もいれし——き、ても入し　・うらは——ふらは

八十九番

左勝　　関

177 国／＼の数かぎりなき伊勢参銭やたまるの関路なるらん

右

178 これや此しるもしらぬもわかれぬは伊勢路の関のつくり山伏

右上句古哥のすがた其まゝにて、いかゞなるうへ、左かのたまり物こそめでたく聞え侍れ。いかにも勝ぬべし。

・古哥の——古哥　・かのたまり——かのたまる　・めてたく——目出

九十番

左　　橋

179 虫けらも安く飛てや渡るらんみぞにかけたるこうろぎの橋

右勝

180 いくたりか四条五条の橋の上老若男女ふみやぶるらん

右尤勝侍べし。

・安く——やかて　・飛てや——とんてや

九十一番

左勝

海路

181 和泉なる界によするはかた船涌出る程おほきから物

右

182 しぶ柿も秋より後のうみべたにけんようもなき風のはや船

右世を海辺とこそ申たるを、へたのきを用られたる心よくも侍らず。左可勝。

・界——堺　・から物——唐物　・き——義　・用られたる——用られる　・よく——能

・左可勝——左為勝

九十二番

左勝

旅

183 旅人の命なりけり用心にさせる刀のさやの中やま

右

184 旅の道はみ物なきに足くひてわらぐつのみや飽満はせし

右はみ物なき道すがらたよりなく聞えけり。左はたのもしきにつきて、勝べきにや。

・さや——小夜　・旅の道——旅の道に　・足くひて——あしくゐて　・右——右の　・つきて——つけて

九十三番

左　　別

185 別行名残おしみのよるの酒酔なきしてものみ明す哉

右勝

186 あすとかといひし別のおしまれて又ひる立もくらす旅人

右旅人の有様ありくと聞えたり。勝べきにこそ。

・酔なき——ゑひなき　・くらす——見えす　・聞えたり——聞え侍る

九十四番

左勝　　山家

187 とちの木のおく山ずみになれる身はにがくしくもさびしかりけり

右

188 山里もやもめ住をばうしとてや妻木をたえずそばにたえずをくらん

左ことがらよろし。勝とす。

・やもめ——やまめ

九十五番

左持 田家

189 秋の田の門の入口牛ほえておくにはうたひすりうすのをと

右

190 かり庵は四でふ半敷あらねどもすきこそみゆれ結句からすき

左 田家のさまあり／＼としたてられたる、言語道断にみえ侍るを、右の鋤耒を当世の数奇に取成、唐物取ならべたる座敷にしたてられたる、いづれと申がたし。しばらく持にても侍らんかし。

・からすき——犁 ・言語道断にみえ侍る——× ・鋤耒——鋤 ・当世の——当世 ・取成——執なし
 ・座敷——座席 ・したてられたるいつれと——したてられたり侍れと ・申かたし——申さし
 ・侍らんかし——候し

九十六番

左 懷旧

191 れうしにも書とめばやと思ふ哉年寄たちのふる物がたり

右勝

192 かひなきは年の寄たる尼が髪たけなといふもみた人はなし

右 題の心もよくかなへり。勝べきにや。

・れうし——料紙 ・みた人は——見た人も ・題——頭 ・勝へき——可為勝

九十七番

左持 夢

193 御佛の太刀をなりともかたげばや夢の中間に生ると思へば

右

194 胸のうへにをきたる手にて結ぶてふおひえて夢の又やさむらん

左右共に心あり。持にや。

・うへに——上

九十八番

左 無常

195 いきてよもあすまで人はながらへじ此夕暮とねがへ後世

右勝

196 うへ死も又醉死もうち死も恋死もいやしなばそら死

左ふるごとそのまゝをかれたる見所侍るを、右は悉皆死の字にてしたてられ、しかも不滅のことはりきこえ、入道蛛の振舞にてかへりて彭祖が齡をもたもつべき人のことぶきとも成ぬべければ、勝の字を付侍べし。

・をかれたる——をかれたり ・かへりて——歸りて ・齡をも——齡を ・成ぬ——成

・付侍へし——侍へし

九十九番

左 述懷

197 歌の道飛たつ計思ふ人猶こしおれに成もこそせめ

右勝

198 哥の会連歌の御会酒の会それよりおほき人の述懷

左 哥道執心尤やさしきを、腰折にては哥合に勝侍らん事おほづかなきにつきて、これも右を勝と定申べし。

・にては——にて・歌合——歌会・事——×・右を——右

百番

左持 祝

199 武士のつるぎを箱におさめよと数珠のつかにて世を祈る哉

右

200 目出たし目いてたしとはよきをいふあしかる事はた、入目なれ

左 干戈をやむるを武

数珠のつかにて天下をいのる道たのもしく侍り。仏法王法武運

民俗さかりなるべき時いたりたる、ことの葉にあらはれ侍り。右あしかる事の入目ならん事、除災与樂の祝詞
何事か是にしかん乎。両首和親の思ひをなさるべき事よろし。持と定申べし。

・おさめ——納・数珠——す、・つか——束・目出たし目いてたし——目出たしなく

・左——右・武——武士とすといへる心しはらく侍り

・数珠のつかにて天下をいのる道たのもしく侍り——×　・ことの葉——言葉
 ・入目ならん——いりならん　・与楽の——与楽　・定申へし——定可申也

左勝四十一　右勝三十一　持廿八

・持廿八——持二十

天文十年辛丑三月十六日

・天文十年辛丑三月十六日——×

・×——玉吟抄　可号誹諧抄也

・×——慶長十三年卯月七日書写之　実祐之

・×——たのむそよ若もまどろむひまあらは吹をとろかせみねの松風

〔追記〕

本資料の翻刻を御許可下さいました陽明文庫名和修文庫長の御高配に感謝致します。

（以上）

（本学教授）